

地域生活を支える
社会福祉法人
第263回

社会福祉法人白百合会〔神奈川県横浜市〕の試み



50年変わらぬ「働く親を支える」想い 食育を礎に、医療・療育の必要性を見据え、 ニーズに即した柔軟な取組を実践する

横浜市初の産休明け保育を行う認可保育園として50年の歴史を重ねながら、要支援家庭や外国籍などさまざまなバックグラウンドをもつ子どもたちやその親と向き合い、離乳食からはじまる食育、卒園児を含めた多世代交流、医療的ケア児の受入れなど時代のニーズに応える。

白百合会

法人名
社会福祉法人 白百合会

本部住所
神奈川県横浜市神奈川区龜住町 9-5

URL
<https://shirayurikai-yokohama.com/>

理事長
柿原 建男



事業内容

- 保育事業
白百合乳児保育園
第二白百合乳児保育園
上末吉白百合保育園
丸山台保育園
西川島保育園



定員60名の第二白百合乳児保育園。子どもたちの健やかな成長を支える場として信頼されている。



園外へ出て、隣の区の小学校まで探検。日々の保育やさまざまな行事を通じて、子どもたちの地域への親しみや愛着を育んでいる。

社会福祉法人 白百合会の沿革

昭和40年代、社会福祉法人白百合会の創設者は、働きながら子育てをする母親たちの苦勞を目の当たりにしていた。地域には産後の働き方に悩む教職員や医療職、経済的に困窮する共働き夫婦などが多くいた。そうした切実なニーズに応えるべく、昭和47年に横浜市内では初めての民間の乳児保育園「白百合乳児保育園」を開設。創設者である現理事長の祖母は保育職の経験はなかったが、各所に足を運んで保育士を集め、開設にこぎつけた。

平成以降は横浜市政と歩みをとにする。大規模マンション建設が続いた横浜市では待機児童問題が深刻化。市有地の無償貸与を受け、法人としては2か所目となる「上末吉白百合保育園」を開設した。続く市立保育園の民営化方針に、白百合会は「公立保育園が一

定の水準を保って公的な保育を担うべき」と複雑な思いを抱きながらも、園児や保護者の不安を払拭するには法人が手を挙げるべきだと判断。民営化の第一弾として「丸山台保育園」の運営を受託することになった。

現在では地域特性の異なる市内5か所で保育園を運営し、そのすべてで産休明け保育を行っている。3歳児以上の幼児保育もニーズの高まった昭和60年から取り組み、今年で法人設立55周年の節目を迎えた。

社会福祉法人 白百合会の 理念と方針

【理念】

- 理念1：次の世代になう大切な子どもたちに、すばらしい保育を
- 理念2：真の男女共同参画社会を築き、働く女性の地位向上を

- 理念3：保護者と共に、子どもの未来を切り拓く力を
- 理念4：地域住民と共に、福祉サービスを必要とする人に「上質なサービス」提供を
- 理念5：白百合会に働くすべての人は、地域社会との協調を深め、福祉社会の実現をはかるために、働く誇りと喜びを

【保育方針】

1. 子どもたちが、心身ともに健やかに成長・発達できる保育内容、良好な環境を保障する。
2. 保護者の方々が、安心して働き続けることができる保育環境を整える。
3. 保護者と手を取り合って子育てをし、その成長の喜びを共感できる関係を築く。

白百合会
の試み

Case 1

時代のニーズに応え
多様な家庭に寄り添い
横浜市初の「産休明け保育」を実現

0歳児クラス。できるだけ家庭に近い環境を意識し、一人ひとりにていねいに向き合いながら、ゆったりとした保育を心がけている。

神奈川県横浜市には、観光客でにぎわう国際港湾都市の顔とは別に、“働く人のまち”という側面もある。古くから漁業従事者が暮らす地域があるほか、巨大な工場群が京浜工業地帯を形成している。

昭和47年、現理事長の祖母がはじめた「白百合乳児保育園」は、生後57日からの預かりを実現し横浜市で初めて産休明け保育を行った認可保育園だ。「3歳児神話」が根幹だった当時、私的契約で産休明け保育を行う保育園はあったが、白百合会のように行政措置として公的に入所を認めたのは、当時としては画期的な試みだった。

わざわざ電車で通う人もいるなど、切実なニーズのある親子が広域から集まった。制度も未整備だった開設当初は、保護者同士が都合をつけて助け合うなど、共同保育所に近い連帯感があり、保護者はサービスの受け手としてだけでなく、自ら保育に参画する担い手としてかかわっていた。

深刻な待機児童問題に直面した時期もあったが、現在、法人本部のある神奈川区は古くからの住民が高齢化し、子ども会がなくなるなど少子化が進む地域となっている。また、市内5か所に点在する保育園は、それぞれ少しずつ地域課題が異なる。なかには、若年出産やDV、児童虐待など、関係機関との連携が欠かせない要支援家庭が多い地域もある。白百合会では、地域課題に応じて家庭に寄り添う保育を続けてきた。

子どもの歩きははじめなど成長の瞬間に立ち会えることは、職員にとって大きな喜びである一方、「本当は自分が見たかった」と残念な想いを抱きながら働く保護者の姿は、職員の胸にも深く刻まれる。さまざまな事情を抱えた世帯があり、保護者との関係づくりにも配慮が求められる。

さらに、保育園には入園理由や月齢の違うさまざまな子どもが集まる。近年は外国にルーツをもつ子どももいる。ときには、背景の

異なる集団を、一体感をもって育てていくことに難しさを感じることもあるが、試行錯誤しながら子どもの育ちと家族の暮らしを支え続ける姿勢は、創設以来変わることなく受け継がれている。



開園当初の屋上に設けられた園庭の様子。当時の指導目標「心とからだの発達に応じた保育」「集団の中で一人一人の個性をのばす保育」のもと、のびのびとした保育を実践している。



働く保護者を支える延長保育。子どもたちは保育者や友だちとかわりながら、安心して思い思いの時間を過ごしている。

白百合会
の試み

Case 2

「食べることは生きること」
乳児を預かるからこそ
大切にしてきた食の文化

幼児クラスでは、野菜の栽培や調理体験を通して「食」への関心を育んでいる。味噌づくりに挑戦している様子。

現場でとくに力を入れているのが食育だ。外注委託に頼らず、天然だしを基本に、素材の力を引き出した離乳食・昼食・おやつを調理室で一貫して提供してきた。チームの一員として調理職員が活躍し、「食べることは生きること」と食の大切さを伝える。人気のあったメニューは献立表で知らせ、毎月の「園だより」には調理室からの発信も載せる。

新入職員には保育理念などの通常の研修に加え、「白百合会の食」について栄養士から伝える機会を設けている。味覚の形成期に素材の味を生かした薄味の料理を与える意味や、咀嚼・嚥下の段階に合わないものを与える危険性などを伝えている。根底には、食習慣の土台をつくる大事な乳児期に子どもを預かる「乳児保育園」としての創設理念がある。初代理事長に「栄養士を置いて、手作りの離乳食を提供できるようにしましょう」と提案したところ、すぐに実現したという。

開設当初から保護者向けの「離乳食試食会」や、地域向けの「給食試食会」にも取り組んでいる。市販のレトルト離乳食が普及するいま、参加者からは「大人の食事から取り分けられる方法を初めて知った」「薄味でも素材の風味を味わえるんですね」といった感想があがる。在園児や子育て家庭だけでなく、近隣他園の保育者、小学校の先生など、幅広い参加者が集う。季節の食材を使った料理や酢の物など、家庭ではあまり見られなくなった献立はとくに好評だ。白百合会では食の大切さを伝えながらも、「正解」として押しつけないように気をつけている。「ご両親が揃っていてもワンオペであったり、料理をする余裕がなかったりすることもあります。手づくりを強要しないよう気をつけています」(柿原 建男理事長)。

試食会をきっかけに保護者が育児講座に参加したり、一時保育利用につながったりと、確かな波及効果が生まれている。イベントを

楽しむうちに、保護者の肩の力がふっと抜けるのを目にする場面もある。柿原理事長は、食の取組として夕食支援や子ども食堂などさらなる展開も考えていきたいと話す。



子ども一人ひとりの発達段階や咀嚼力に応じて離乳食を提供。栄養士が彩り豊かな献立づくりに取り組んでいる。



お正月には、しめ縄づくりや鏡餅づくりを体験。しめ縄は稲づくりからかわるなど、年間を通じて食や暮らしにかかわる文化を学ぶ機会を大切にしている。

白百合会
の試み

Case 3

卒園してもいつでも集える
居場所、多世代が交流できる
拠点としての取組

地域の小学校の校長を招き、教育懇親会を開催。小学校同士をつなぐ役割を果たしている。

地域とつながる取組として、多世代交流も大切にしている。卒園した児童や保護者と交流を続けるほか、地域の小・中・高校からの交流依頼も積極的に受け入れている。白百合乳児保育園で毎年行う「しらゆり夏まつり」では、小学校3年生までの卒園児に案内ハガキを出している。

「保育園児は卒園後の就学先がばらばらです。そんな子どもたちが集まれる場になり、居場所があるんだよ、というメッセージになればいいと思っています。職員にとっても、自分たちが送り出した子どもを見届けたい思いがあります。保護者や在園児には、何年後かの将来のイメージを描いていただくこともつながるかなと思います」と柿原理事長は話す。

保育園が誰にとっても安心できる場所であり、「行きたい、つながりたい」と思ってもらえることをめざしている。

横浜市で幼保小連携が進んでいることを受けて、園児が近隣の小

学校に出かける機会もある。小学校6年生が異世代交流の授業の一環としてお祭りを開催し、地域の高齢者や園児を招いている。小学生が披露する歌や踊りは、園児たちのよい刺激になっている。中高生の家庭科実習や職業体験も、積極的に受け入れている。

核家族化が進む現代では、人生で初めて接する乳児が自分の子どもであるという人も少なくない。実習に来てどうしたらよいかかわからず、ただ立ち尽くす中高生もいる。「小さな子どもとふれあう機会を提供できることは、人のその後の育ちにとって大事だと感じています」と柿原理事長は話す。

高齢者とのつながりも保ていきたいが、後継者不足で老人会の活動が停滞するなど、地域の高齢化の課題もある。また、園児の安全を確保しながら、積極的に地域へ出て行くことは、いまの時代、容易ではないとも感じている。

時代の変化に対応しながら、バランス感覚をもって最良の経験を

子どもたちに与えたいと考えている。



卒園した中学生がボランティア体験で園を訪れることもある。園児と遊ぶための準備から実際の交流まで、さまざまな体験の機会を提供している。



地域の消防署の協力のもと、消火訓練を実施。地域の方がたとの交流は、子どもたちの世界を広げる貴重な機会となっている。

白百合会
の試み

Case 4

50年の歴史を礎に
子どもたちが育つ地域全体に視野を広げ
時代に合った取組を実践していく

毎年実施している、1・2歳児クラスの親子遠足。保育者、保護者、地域の方がたに見守られながら、子どもたちは探索や発見を楽しんでいる。

それぞれの園では地域の未就学児のため、定期的に園庭開放日や施設来園者と園児とが園庭を共有する機会をつくっている。ポイントとなるのは「つなぎ役」となる職員だ。全員の安全確保はもちろんだが、来園者に疎外感を抱かせない気配りなど、高いコミュニケーションスキルが求められる。白百合会では「つなぎ役」である職員を中心に、保護者に自然に声をかけることで悩み相談をはじめなど、ゆるやかな関係が生まれている。

「まずは保育園があること、困りがあれば頼れる存在であることを知ってもらえるようにさまざまな取組を行っています。しかし、本当に支援を必要とする人ほどなかなか表に出てこられない。そうした人たちにも届くようにできる限りのアプローチでサポートしていきたいと思っています」（柿原理事長）

今後の展開として関心をもっているのが療育支援だ。近年では、

発達にグラデーションのある子どもたちが在園することも多い。療育機関への通所は、子ども自身、そして働く保護者にとって大きな負担となる。法人に療育支援の機能があれば、就学まで途切れない、一貫した保育を提供できるのではないかと柿原理事長は考えている。

また、在園中に、血糖管理が必要になった子どもがいた経験から、現在は医療的ケア児サポート園の指定を受けている園もある。

「働く親のために」と法人を設立し、50年にわたって保育事業を行ってきたが、時代の変化とともに男女共同参画や地域共生を実現するための新しい理念の必要性を感じているという。それは古い理念を捨てるということではなく、大切にしてきた設立理念を次の時代にも途切れず実践できるようにするためだ。

「いまや保育園だけで完結する時代ではありません。社会福祉人としてのあり方を問い直し、子どもたちが育つ地域全体に目を向

けなければならない。高齢者や障がいのある方の地域生活も考え、それぞれが過ごす拠点とのネットワーク構築も視野に入れなければいけないと感じています」と柿原理事長は未来を見据え、想いを語る。

「働く親を支える」想いと食を通じて育んできた子どもとの向き合い方は、医療的ケアや療育、多世代交流という新たな取組の土台となっている。地域に生きるさまざまな人に寄り添い、時代に合わせた展開を考えていく。



次年度の園内研修に向けたグループワーク。白百合会では、職員同士で学びたいテーマを考えるなど、「学び合う職員集団」の風土ができていく。